

日本の歴史 6

情報サービス課 稲垣 宏行

『日露戦争の世紀：連鎖視点から見る日本と世界』 山室信一 著 (岩波書店) xii,249,7p.

日露戦争終結から今年でちょうど100年。日本人にとって、あの戦争をもう一度冷静に見つめ直す時期に来ているのではないのでしょうか。

著者は、まず両国が戦争に至った原因や、その当時の日本の国情がどのようなものであったのかに焦点を当てています。しかし、興味深いところはロシア軍の寮歌「アムール河の流血」のメロディーが、日本の軍歌や学生運動のメロディーに使われたことを取りあげていることで、ロシア文化が多少なりとも日本に影響を与えていることを紹介しています。また、世界に与えた影響として、戦後、戦争の当事国であるロシアをはじめ、多くの国々で革命が勃発し、そこから社会主義が「連鎖的」に生まれてきたことを挙げて、20世紀が「戦争と革命の世紀」になったことを述べています。このように著者は、これまでの日露戦争研究と異なる角度から、世界の国々と民衆に与えた影響を捉え、100年後に生きる私たちに風化していく当時の様子を再認識させようとしているのです。

210.67-Yam

『フランスから見た幕末維新：「イリュストラシオン」日本関係記事集から』

朝比奈美知子 編訳 増子博調 解説 (東信堂) xxix,418p.

日本の視点から見て、海外が異なった文化を持つ国に見えるのと同じく、海外の視点から日本を見れば、やはり文化の違いが際だって映るのでしょうか。

本書では、フランス紙「イリュストラシオン」の記事を中心に、江戸時代末期から明治時代の日清戦争勃発期までの日本文化を版画やスケッチ、またフランス人によるエッセイなどを交えて、彼らの視点から語っています。列挙されている記事の中には、日本文化に対する批判や拒絶もあり、思い違いと考えられる反応も何点も見受けられます。しかし、日本文化に対して概ね好意的で、その思いが顕著に現れています。さらに、増子氏によって書かれた巻末の「解説」は、日本とフランスの外交関係を扱ったもので、この時期の両国関係の出来事が客観的に述べられています。

210.58-Fura

『刀狩り：武器を封印した民衆』 藤木久志 著 (岩波書店) viii,243p.

「刀狩り」といえば、民衆から全面的に武器を没収する政策と感じてしまうでしょう。しかし、それは間違いで、著者は豊臣秀吉による「刀狩り」発令後も民衆が大量に武器を所持していたと述べています。その後の為政者たちも、江戸・明治・昭和時代にかけて「惣町人刀停止令」や「魔刀令」など、武器の所持に対する法規制を行ってきましたが、全ての武器を民衆から奪うには至らなかったそうです。ほぼ完全に武器の規制に成功したのは、1945年にアメリカを中心とした占領軍が日本に登場してからですが、その時没収された日本刀だけでも全国に530万本あったと述べています。

また、著者は民衆がそれらの武器を自らの意志で使用を抑制してきたという見解を示しています。しかし、民衆が抑制してきたとしても、なぜ彼らは長きにわたって武器を所持出来たのでしょうか。その謎は「武装解除史」である本書が解き明かしてくれます。

210.04-Fuj



いながき ひろゆき (係)